

令和7年6月13日
生涯学習・文化財課
担当 竹内
(内線 5356)
直通 087-832-3787

記念物の指定にかかる国の文化審議会の答申について

国の文化審議会（会長 しまたに ひろゆき 島谷 弘幸）は、令和7年6月20日（金）に開催される同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、史跡及び天然記念物の追加指定等について、下記のとおり文部科学大臣に答申を行いましたので、お知らせします。

記

1 答申される香川県内の記念物

（1）史跡

新名称	史跡「 さぬきへんろみち 讃岐遍路道	だいこうじみち 大興寺道	まんだらじみち 曼荼羅寺道	まんだらじけいだい 曼荼羅寺境内	しゅつしやかじけいだい 出釋迦寺境内
	こうやまじけいだい 甲山寺境内	ぜんつうじけいだい 善通寺境内	ねごろじみち 根香寺道	ねごろじけいだい 根香寺境内	しどじけいだい 志度寺境内
	おおくぼじけいだい 大窪寺境内				おおくぼじみち 大窪寺道

↑

旧名称 史跡「さぬきへんろみち讃岐遍路道 まんだらじみち曼荼羅寺道 こうやまじけいだい甲山寺境内 ぜんつうじけいだい善通寺境内 ねごろじみち根香寺道 しどじけいだい志度寺境内 おおくぼじみち大窪寺道」

※今回の追加指定に伴い、名称が変更になります。

2 文化財の概要

資料1のとおり

3 答申される史跡の件数

（1）史跡（特別史跡含む）の件数

全国の新規指定件数7件、追加指定等件数31件

香川県の追加指定件数1件

答申・告示後の史跡の指定件数1,917件（うち特別史跡65件）

答申・告示後の香川県内の国指定文化財件数

指定件数185件、うち史跡26件（特別史跡1件含む）

さぬきへんろみち 讃岐遍路道
 だいこうじみち 大興寺道
 まんだらじみち 曼荼羅寺道
 まんだらじけいだい 曼荼羅寺境内
 しゅつしゃかじけいだい 出釈迦寺境内
 こうやまじけいだい 甲山寺境内
ぜんつうじけいだい 善通寺境内
ねごろじみち 根香寺道
ねごろじけいだい 根香寺境内
しどじけいだい 志度寺境内
おおくぼじみち 大窪寺道
おおくぼじけいだい 大窪寺境内

1 四国遍路の概要

四国遍路は、弘法大師ゆかりとされる多数の寺社を巡る、長大な霊場巡礼であり、弘法大師信仰に支えられ、僧侶や修験者から民間に広く普及した我が国を代表する巡礼である。四国4県にまたがり88か所の札所を繋ぐ遍路道は、四国全域という広い範囲に配置された寺社（複数の霊場）を巡る回遊型巡礼を支えた円環状の巡礼道であり、全長1,400kmにも及ぶ。

その始まりは定かではないが、平安時代後期の『今昔物語集』や『梁塵秘抄』などに「四国の辺地」と記されるように、僧侶等による修行に源流が認められ、中世末頃には、僧侶等による修行に加え、僧侶以外の人びとによる巡礼も始まる。

江戸時代に入り、「八十ヶ所」が固定化し、貞享4年（1687年）の『四国辺路道指南』（真念編著）が出版されて以降、現在に続く「四国遍路」の形式が広く普及していく。大師堂の建立や茶堂、通夜堂、道標の設置など、札所や遍路道が徐々に整備されていく。

明治時代には政府による宗教政策（神仏分離）の影響を強く受け、一部の札所の移転等の変容はあったが、維持され、現在にまで継承されている。

四国遍路の本質的価値は、「江戸時代に確立・定着した四国遍路の実態と変遷を示す」ものであると言え、以下の3点に集約できる。

- ①江戸時代に確立した特徴的な巡礼の様相を伝える札所と遍路道
 - ②四国全域を円環状に廻る回遊型巡礼を反映した遍路道
 - ③一般的な江戸時代の社寺とは異なる方向で発展した札所
- これらに加えて、その他の価値として以下の点も挙げることができる。
- ・札所として固定化される以前の多様な歴史を有する。
 - ・かつての景観（佇まいや面影）を今なお良好に残す。
 - ・絵図や日記などに代表される動産資料から四国遍路道の歴史をうかがい知ることができる。

2 讃岐遍路道の概要

讃岐遍路道とは、四国遍路道のうち、香川県域に所在する江戸時代に確立・定着した四国遍路の実態と変遷を示す札所と遍路道で構成されるもので、第67番大興寺から第88番大窪寺までの22か寺が所在する、延長約190kmの道筋である。

これらのうち、平成25年に82番札所根香寺に向かう「根香寺道」、平成26年に第72番札所曼荼羅寺に向かう「曼荼羅寺道」、平成29年に第75番札所の「善通寺境内」、令和3年に第88番札所大窪寺に向かう「大窪寺道」、令和4年に第86番札所「志度寺境内」、令和7年に第74番札所「甲山寺境内」が既に史跡指定されている。

3 追加指定される札所・遍路道の概要

大興寺道（観音寺市栗井町）

四国八十八ヶ所霊場第 66 番札所雲辺寺^{うんべんじ}から、第 67 番札所大興寺を結ぶ約 9 km の遍路道のうち、約 1.6km の区間である。

大興寺道の沿道には、江戸時代を中心とした丁石^{ちようせき}や道標^{どうひょう}、遍路墓が確認でき、古道の旧状を残している。雲辺寺からの起点付近には、2 基の遍路墓が確認できるほか、三十三丁石の付近には、18 世紀後半から 19 世紀はじめにかけて、遍路道に多数の道標を設置した武田徳右衛門^{たけだとくえもん}の設置した道標や、江戸時代の史料に存在が確認できる白藤大師堂^{しらふじだいしどう}の跡地も分布する。さらにその付近には、遍路墓も残されており、遍路の往来の実状を示す旧状をよく残す。

曼荼羅寺境内（善通寺市吉原町）

第 72 番札所曼荼羅寺の境内で、善通寺市吉原町に所在する真言宗の寺院である。

創建時期は、史料や発掘調査の成果から、古代末まで遡り、弘法大師空海の修行の由緒地として知られていた（『東寺百合文書』ユ函）、寺号は空海奉納の由緒を持つ曼陀羅に由来するとされ、中世においても、弘法大師空海の由緒地^{どうう}として認識されていた。

中世後半以降は、永禄元年（1558）に堂宇が焼失し（『西讃府誌』嘉永元年（1848））、中世末には境内の荒廃が進んでいた。

江戸時代以降、境内の堂宇の再建のため、延宝 9 年（1681）から勧進^{かんじん}が行われ、堂宇は再興され、19 世紀前半までに境内整備は概ね完了したと考えられる。境内は北側から続く遍路道に対して本堂・大師堂が東向きに建てられており、現存する堂宇には、近世の鐘楼（19 世紀中葉）や仁王門（18 世紀後葉）があるほか、本堂も位置や方位は保たれている。

出釋迦寺境内（善通寺市吉原町）

第 73 番札所出釋迦寺の境内及び奥の院で、善通寺市吉原町に所在する真言宗の寺院である。

出釋迦寺は、曼荼羅寺より南方 0.5km に位置する寺院であり、縁起では弘法大師空海が幼少期に我拝師山^{がはいしやま}での捨身行^{しゃしんぎよう}の際に雲に乗る釋迦如来が現れ、その後、虚空菩薩^{こくうぼさつ}を彫像して伽藍^{がらん}を整備したことが開基^{かいき}であると言われている。史料上では、『四国遍路道指南』（貞享 4 年（1687））が初出となる。山上にあったとされる札所は『東寺百合文書』において、弘法大師空海修行地の靈跡^{れいせき}「施坂御堂^{せさかみどう}」が所在したとされ、曼荼羅寺の奥の院として機能していた。その後、17 世紀中頃までには、山上にあった札所を山麓に移し、現在の境内地に堂宇が建立された。

17 世紀代の堂宇は最小限であったが、江戸時代後期までには現在の形に整備され、現存する堂宇は、尾根を 3 段に造成し平坦面上にあり、それらに伴う石垣は、18 世紀から 19 世紀にかけてのものとなる。建物では 18 世紀の本堂や、大師堂、地藏堂や本坊があり、江戸時代の絵図に記される配置をよくとどめている。

また、奥の院は我拝師山^{がはいしやま}の鞍部^{あんぶ}にある本堂から西側斜面にかけて、鎌倉時代前期から南北朝期の摩崖五輪塔^{まがいごりんとう}や宝塔^{ほうとう}等の石造物が分布しており、空海の捨身行伝承池としての旧景をとどめている。

根香寺境内（高松市中山町）

第 82 番札所根香寺の境内で、高松市中山町に所在する天台宗の寺院である。

創建については、同じ五色台山塊にある第 81 番札所である白峯寺の縁起によると、貞観 2 年（860）に像が根香寺に安置されたといわれている。寺蔵の本尊木造千手観音立像^{ほんぞんもくぞうせんじゅかんのりゆうざう}や考古資料からは、11 世紀から 12 世紀の年代が考えられる。史料上の初見としては、本堂にある木造智証大師像^{もくぞうちしやうだいしざう}の底の銘にある元徳 3 年（1331）の年紀がある。

その後の中世後半には、根香寺は細川家の庇護を受けていたことが『蔭涼軒日録』等に記載されている。天正 13 年（1585）に羽柴秀吉の四国攻めに伴い、讃岐の有力戦国武将の香西氏が、西長尾城に退く際に、根香寺の仏殿に納められた証文・家宝等を狙う盗賊により仏殿に火がかけられ、戦国時代には荒廃が進んだとみられる。慶長年間（1596～1615）に第 2 代高松藩主である生駒一正^{いこまかずまさ}が堂宇を再興し、18 石の寺領を寄進した。その後高松藩に入封した松平頼重^{にゆうほう}も本堂を再興し、天台宗に改宗させ、聖護院門跡^{しょうごいんもんぜき}の末寺としたほか、金堂や護摩堂、祖師堂、僧房等の堂宇の造立のほか、寺領の加増などを行った。享保 3 年（1718）の火災で、護摩堂・客殿・玄関・眠蔵^{めんざう}・庫裏が消失したが、その後に中興が図られている。

境内の建物としては、五大堂（宝暦 4 年（1754））や大師堂、鐘楼、仁王門等といった 18 世紀前半の火災後に復興された建物が残されるほか、位置は移動しているが、材や意匠は近世のものである本堂がある。以上のように、「根香寺境内」はその歴史的価値に加えて、『四国遍札名所図会』や『金毘羅参詣名所図会』^{こんびらさんけいめいしよずえ}といった史料に記された近世の境内空間がよく残されている。

大窪寺境内（さぬき市多和兼割）

第 88 番札所大窪寺の境内で、さぬき市多和兼割^{たわかねわり}に所在する真言宗の寺院で、四国遍路の結願寺^{けちがん}となる札所寺院である。

創建は、縁起では行基により開山され、その後、弘法大師空海により現境内の位置に再興したといわれている。

このほか、平安時代のものと考えられる本尊の薬師如来坐像^{やくしにょらいざざう}や、鉄製錫杖^{しゃくじやう}、寺蔵の考古資料の土師質土器や瓦から、中世までに境内の伽藍整備が一定程度進んでいたと考えられる。

中世以降、天正年間に長宗我部氏の侵攻により、多くの堂宇が焼失し、衰退したといわれているが、江戸時代の高松藩主である松平頼重は、大窪寺に寺領を寄進する等、手厚く庇護をはかった。以後も高松藩の援助を受け、大窪寺は再興を果たし、その後は第 88 番札所として栄えた。

境内は山麓の斜面を平坦に造成しており、縁辺は石垣にて保護されている。石垣はその特徴から 19 世紀代のものと考えられ、境内の建物については、明治 33 年（1900）の火災により二天門以外の堂宇を失うが、明治期のうちに本堂、大師堂や阿弥陀堂が同位置に再興され、旧状に復された。

また、背後の女体山の西尾根にある奥の院は、元禄 2 年（1689）の『四国徧札霊場記』にみえる本尊阿弥陀、観音^{かんのんなり}也に対応する可能性がある石仏が岩窟内に納められており、東尾根には行場^{ぎやうば}跡があるほか、本堂背後にそびえる岩崖として、境内空間を構成している。

4. 既往の調査

①大興寺道

『讃岐遍路道 さぬきへんろみち 大興寺道 だいこうじみち 調査報告書』

調査機関：観音寺市

調査期間：平成 29 年度（令和元年度 報告書刊行）

調査概用：測量調査、発掘調査、石造物の調査

②曼荼羅寺境内

『四国八十八ヶ所霊場 しこくはちじゅうはちしやうれいじょう 第七十二番札所 ばんふだしよ 曼荼羅寺 まんだらじちようさほうこくしよ 調査報告書』

調査機関：香川県・香川県教育委員会

調査期間：平成 21 年度、平成 27 年度（平成 30 年度 報告書刊行）

調査概要：建造物・石造物・所蔵文化財の調査

③出釋迦寺境内

『四国八十八ヶ所霊場 しこくはちじゅうはちしやうれいじょう 第七十三番札所 ばんふだしよ 出釋迦寺 しゅつしやかじちようさほうこくしよ 調査報告書』

調査機関：香川県・香川県教育委員会

調査期間：平成 21 年度、平成 27 年度、平成 29 年度（平成 30 年度 報告書刊行）

調査概要：建造物・石造物・所蔵文化財・奥の院の調査

④根香寺境内

『ミュージアム調査研究報告』第 4 号

調査機関：香川県歴史博物館（現：香川県立ミュージアム）

調査期間：平成 17 年度～平成 18 年度（平成 24 年度 報告書刊行）

調査概要：所蔵文化財等の総合調査

『四国八十八ヶ所霊場 しこくはちじゅうはちしやうれいじょう 第八十二番札所 ばんふだしよ 根香寺 ねごろじちようさほうこくしよ 調査報告書』

調査機関：香川県・香川県教育委員会

調査期間：平成 21 年度、平成 23 年度（平成 24 年度 報告書刊行）

調査概要：建造物・石造物・所蔵文化財の調査

⑤大窪寺寺境内

『調査研究報告』第 3 号

調査機関：香川県歴史博物館（現：香川県立ミュージアム）

調査期間：平成 17 年度～平成 18 年度（平成 18 年度 報告書刊行）

調査概要：所蔵文化財等の総合調査

『四国八十八ヶ所霊場 しこくはちじゅうはちしやうれいじょう 第八十二番札所 ばんふだしよ 大窪寺 おおくぼじちようさほうこくしよ 調査報告書』

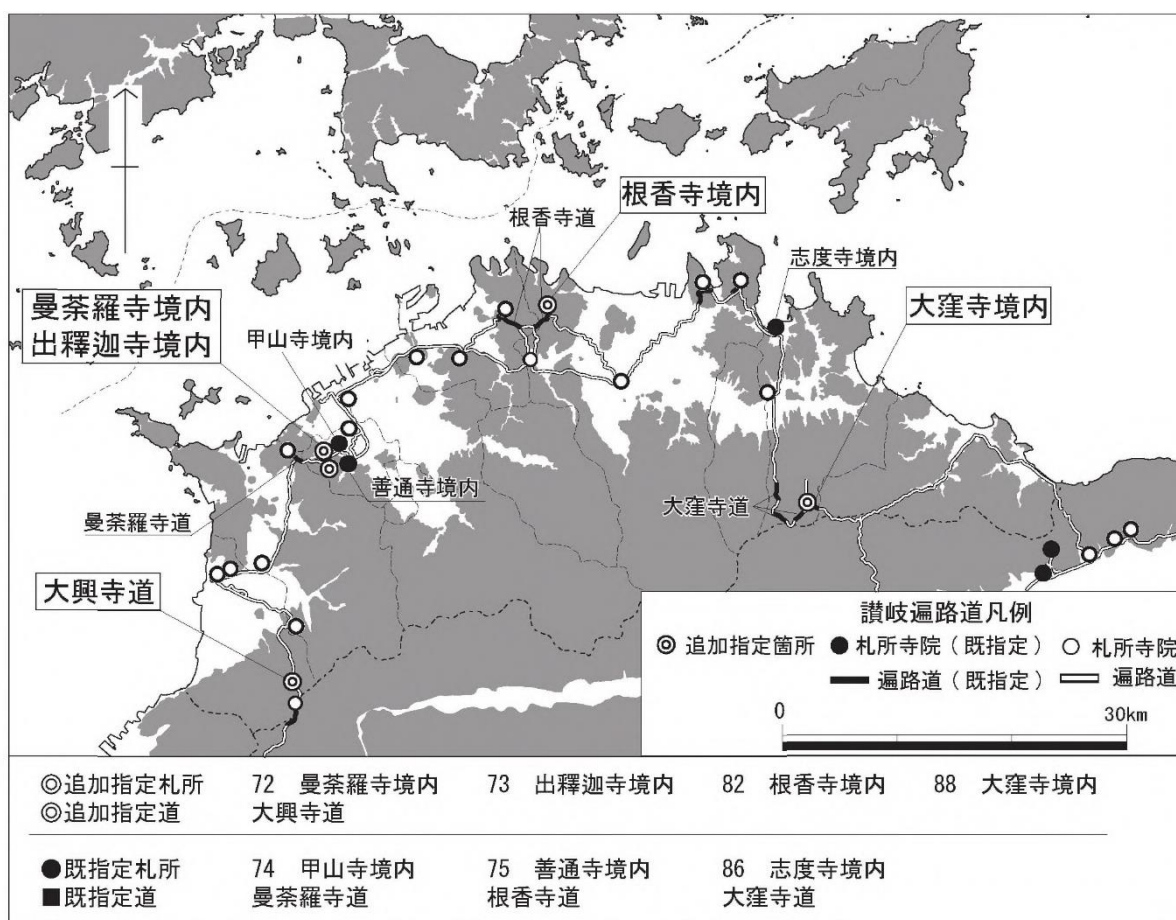
調査機関：香川県・香川県教育委員会

調査期間：平成 21 年度、平成 26 年度、令和 2 年度（令和 3 年度 報告書刊行）

調査概要：建造物・石造物・所蔵文化財・奥の院の調査



讃岐遍路道（大興寺道、曼荼羅寺境内、出釋迦寺境内、根香寺境内、大窪寺境内）の位置図①



讃岐遍路道（大興寺道、曼荼羅寺境内、出釋迦寺境内、根香寺境内、大窪寺境内）の位置図②